

### 1. 「ペルー北部地域の遺跡踏査：地域間ルート試論」

山本 睦（山形大学）

本発表では、2014 年にペルー北部地域（図 1）で実施した遺跡踏査にもとづく新たなデータを中心に、先行研究や周囲の生態環境などを考慮しつつ、ペルー北部における地域間ルートについて論じる。

これまで発表者らは、ペルー北部にあるワンカバンバ川流域とチョターノ川流域において、詳細な遺跡分布調査をおこなってきた。その結果、両流域社会の通時的展開、とくに形成期（紀元前 3000 年—紀元前後）の社会変化に際して、神殿と称される祭祀建造物をめぐる諸活動と、それに深く関わる周辺地域との地域間交流が重要な役割をはたしたことを明らかにしてきた。

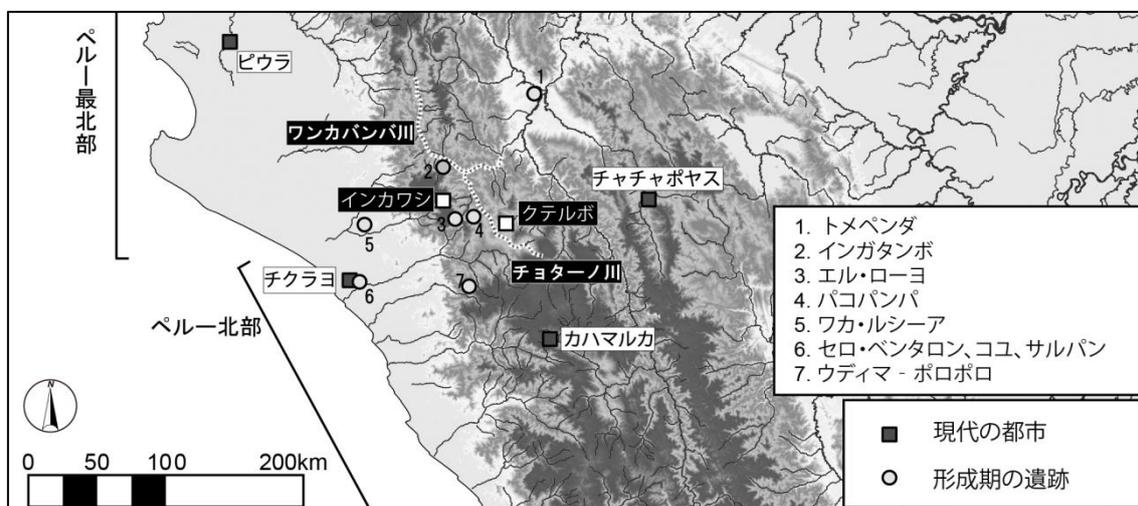
以上の成果をうけて、形成期の社会変化と地域間交流の関係性をより実証的に示していくために、ワンカバンバ川流域とチョターノ川流域の間にあるインカワシ市およびクテルボ市の周辺地域の遺跡踏査を計画し、新たなデータの獲得を目指した。

上記の調査範囲は広大で、セトルメント・パターン研究を目的とするような特定地域内の網羅的調査を短期間でおこなうことは困難であった。そのため、地域間交流、つまりは地域間ルートを切り口として、神殿遺跡や岩絵遺跡に特に着目しながら河川や尾根を中心に踏査をおこなった。また、これまでに先行研究がない地域においては、地元自治体や収集家への聞き取り調査などを通じて、データを補足した。

調査の結果、インカワシ市近郊では、パコパンパ遺跡およびエル・ローヨ遺跡と、ワンカバンバ川流域を含むより北方の地域、そして西方の海岸部とを結ぶルートを同定した。この根拠としたのは、ルート上に並ぶ神殿遺跡と岩絵遺跡の存在である。

また、クテルボ市近郊については、データは乏しいものの、岩絵遺跡やハエンおよびチョーロスの博物館収蔵資料から、パコパンパ遺跡およびカハマルカ地方と、ワンカバンバ川流域やハエン地方といった北方や東方の地域へいたるルートを想定することが可能となった。

図 1 調査地と関連遺跡



## 2. 「ヘケテペケ川中流域第6次調査：モスキートZ神殿の発掘」

鶴見英成（東京大学総合研究博物館）、  
カルロス・モラレス（ペルー文化省）

申請者は2003年よりペルー共和国カハマルカ県のヘケテペケ川流域、とくに中流域北岸のアマカス平原を中心として調査を重ね、形成期前期（紀元前1500-1250年）から中期（紀元前1250-800年）にかけての神殿建築の変遷を解明した。さらに2009年より南岸モスキート平原にて発掘を開始し、形成期早期（先土器期末期、紀元前2000-1500年）において、モスキート平原に大規模公共建築群が築造されていたとの見通しを得た。2011年にモスキート平原東端の大規模マウンド（Z1基壇）を発掘し、やはり土器が不在であること、また年代測定結果が紀元前2千年紀前半に対応することがわかった。2013年に平原内の遺構群の精査とトータルステーション測量を行い、Z1基壇を中核とするモスキートZ神殿を中心とする発掘調査計画を立て、2014年7～8月に発掘調査を実施した。この発表ではその成果の概要を示す。

カラル遺跡に代表されるペルー中央海岸～北中央海岸部の形成期早期の神殿建築の多くは、方形のピラミッドの中心軸上に、地上から基壇頂上までを結ぶ主階段を備える形態を特徴とするが、モスキートZ1基壇は異なる様相を示す。まず基壇は直線的な壁で構成されるものの全体の平面形は方形ではない。南北方向に長く、東西の長辺に小規模な基壇を伴う十字形である。また上記のような主階段は存在せず、各所に配置された狭く短い階段を登り継いで地上から基壇頂上部までアクセスすることとなる。頂上部には正方形の部屋状構造物がいくつか並んでいる。既知の事例と比較した場合、もっとも近いのはワヌコ盆地のコトシュ遺跡コトシュ・ミト期建築である。

発掘現場は崩れやすいため十分に掘り下げることができなかったが、土留め壁の改変を伴う大規模な更新は少なくとも2回行われている。将来、より下層の建築まで掘り下げてその更新過程と年代を解明することとしたい。なお工芸品はまったく出土しなかったが、植物性のさまざまな有機物が良好な状態で遺存しており、現在その分析を進めている。

## 3. 「ペルー北部ワカ・パルティエダ遺跡の神殿更新について」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）、  
ビクトル・バスケス（ペルー・アルケビオ研究所）

ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷のワカ・パルティエダ遺跡にて、2002、2004、2013年と、発表者はこれまで3シーズンにわたって発掘調査を実施してきた。その成果の一つとして、セロ・ブランコ期すなわち形成期中期（1100-800BC）には多彩色壁画やレリーフで外壁の大半が覆われた神殿が存在したことが明らかになっている。今回報告するのは、形成期中期の神殿を埋め始めて、その上に形成期後期の神殿を建てるまでの期間に、同遺跡に残された遺構や遺物についてである。いわゆる「神殿更新」の最中に行われていた、儀礼的なものを含む様々な活動に関わるデータが蓄積されてきた。ワカ・パル

ティエダ遺跡の周辺地域は乾燥しており、動植物遺存体の保存状態は良好である。そのため、例えば動物や人間の糞までも同定されることになった。そのような最新の分析結果から、形成期中期の壁面前などで、神殿更新の最中に行われた諸活動について考察する。

#### 4. 「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料： 資料形成過程の解明に果たすタフォノミー分析の可能性について」

鵜澤和宏（東亜大学）、  
ディアナ・アレマン（ペルー・サンマルコス大学）、  
関 雄二（国立民族学博物館）

ペルー北部高地、パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから検出された動物骨について報告する。本調査発表の目的は2つある。第1に出土動物骨の詳細を記載し儀礼行為の理解に供すること、第2に、近年、実践論的視点から資料の形成過程が注目されている研究動向を鑑み、動物骨資料がもつ新たな可能性を示すことである。

今回報告する資料は、パコパンパ神殿第1基壇の中心部に、等間隔で配置された複数の土坑から検出されたものである。哺乳類の四肢骨破片を中心に鳥類などを包含する。動物骨と儀礼行為の関係については、それぞれの土坑における動物種、部位の組み合わせを検討する必要があるだろう。しかし、有機物である動物骨は分解・消失しやすく、個体の死から土中への埋没、発掘調査による回収まで、保存に関するバイアスを強く受けている。したがって動物考古学的分析においては、保存バイアスの程度を評価することからはじめるのが通常である。ところで、環境の影響を受けやすいという骨資料の特性は、骨が完全に分解消失してしまわない限り、個体の死から埋蔵・保存に至る様々なイベントまで、骨の上に記録されることをも意味する。地表面での放置、踏みつけ、風化などと関連する骨表面の微小な擦痕や崩落などもその一例である。従来、これら骨の改変に関わる情報は、資料形成の背景雑音と見なされ、アンデス考古学においては積極的に活用されることは少なかった。しかしながら実践論的な解釈において重視される、個々の遺物のライフヒストリーを復元するという視点からみると、個体の死後に生じた骨の改変は、遺跡に持ち込まれた動物（骨）がたどった過程を読み解く有益な情報となるだろう。本報告では、動物考古学が蓄積してきた基本情報に新たな役割を与え、遺跡における動物利用に関してより多くの知見を得るための方法論的枠組みについても展望する。

#### 5. 「先コロンブス期の中間領域における祭祀メタテに関する考察 —ニカラグア共和国、コスタリカ共和国での調査から—」

植村まどか（京都外国語大学大学院博士前期課程）

メタテとは、メソアメリカ地域において古代より日常的にトウモロコシやカカオなどの食物の製粉作業に使用されていた石皿のことである。中間領域（図1）では、日常的に用いられていたメタテの他に、平坦部の表裏や脚部に線刻文様が施され、ジャガーやワシなど

の動物を形象した「祭祀メタテ」と呼ばれているメタテが確認されている。これらのメタテは墓からの出土例が多いことから祭祀メタテと呼ばれているが、それらの祭祀メタテが先コロンブス期の社会においてどのように使用され、どのような役割を担っていたのかは未だ明らかにされていないのが現状である。

本発表では、発表者がニカラグア共和国、コスタリカ共和国（以下ニカラグア、コスタリカ）で実見した 89 点の祭祀メタテから、①祭祀メタテの型式分類と平坦部表面の使用痕（図 2）の相関関係、②出土分布と出土状況、③祭祀メタテを模したと思われる土製品の分析を行う。そして、祭祀メタテがイスとして用いられたのではないかという仮説について考察する。分析から得られた所見は以下の通りである。

1. 型式分類と使用痕の相関関係から、Ⅰ型には使用痕の残り方に 4 種類の違いがあり、Ⅱ型には 2 種類の使用痕が確認できた。Ⅰ型、Ⅱ型の間では使用方法の違いが考えられる。さらにⅠ型全体の使用痕はイスとして、長辺の使用痕は製粉作業、短辺の使用痕は座した状態での所作によるものだと考えられる。
2. Ⅰ型はニカラグア南部太平洋岸、コスタリカ北西部（ニコヤ半島）から中央盆地にかけて、Ⅱ型はコスタリカ南部およびカリブ海岸で確認されている。Ⅰ型の分布のうちニカラグアからコスタリカ北西部にかけての太平洋岸はメソアメリカ地域に属している。
3. コスタリカでは、Ⅰ型の祭祀メタテ上に人が座した状態を模したと思われる土製品が確認されており、Ⅰ型の祭祀メタテには「座る」という使用方法があったと考えられる。

上記のことから、ニカラグアおよびコスタリカにみられるいわゆる祭祀メタテのⅠ型は、イスとして使用され、メソアメリカ地域にみられる玉座との関係性を考察することができる。



図 1 中間領域の範囲

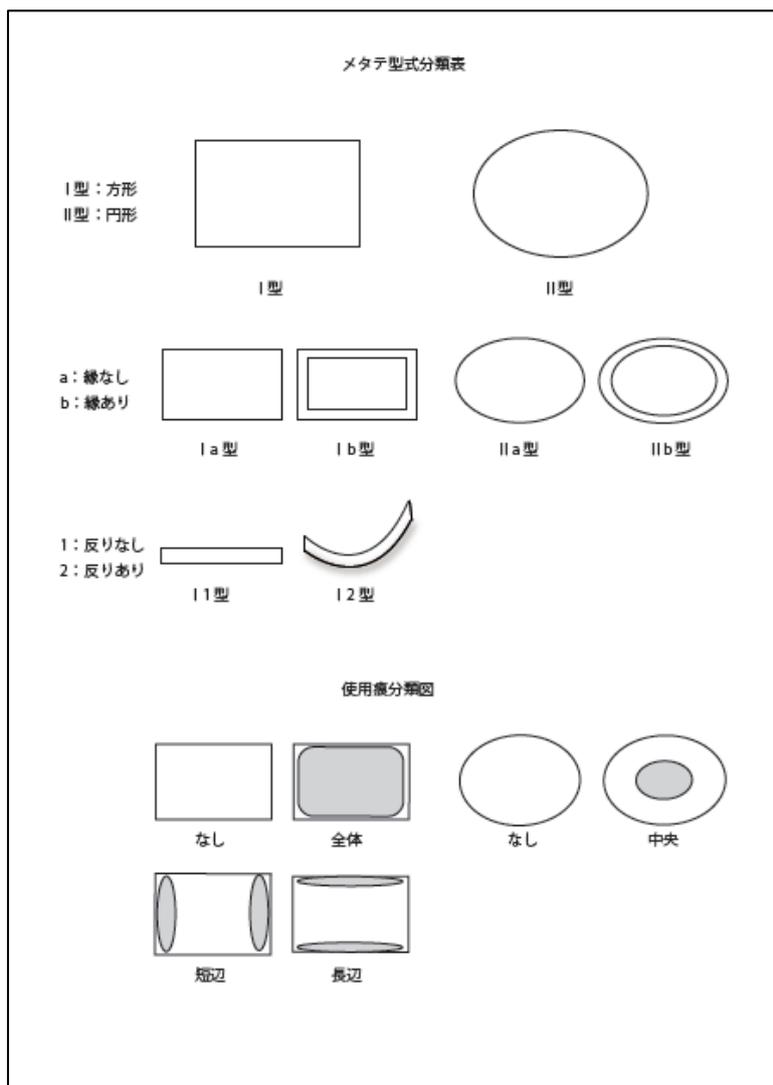


図 2 祭祀メタテの型式分類と使用痕分類図

## 6. 「マヤ南東地域における広域編年確立のための年代学的研究」

市川 彰（日本学術振興会特別研究員 PD・  
国立民族学博物館外来研究員）

エルサルバドルでは 1970 年代後半に構築された土器編年や年代測定データが、現在もなお指標として用いられている。しかし、発表から約 35 年が経過した現在、土器資料の蓄積や年代測定技術の進歩により編年に齟齬もみられることから、再考が必要な段階にきている。また、年代測定データが蓄積されてきたものの、個別報告にとどまっており、時期や地域が異なる個別報告を統一し、比較検討した研究はこれまでにない（図 1）。本発表では、マヤ南東地域の広域編年確立にむけた基礎研究として、鍵層となる複数の火山灰に関連する新たな年代測定データとともに、これまで発表者が実施してきたエルサルバドル出土

土器の型式学的検討をくわえ、エルサルバドルの考古編年を再考する。

はじめに新たな資料と先行研究で報告されている資料計 133 点の年代測定データを暦年代較正プログラム Oxcal v4.2.4 を用いて、較正年代を算出した。さらに年代測定資料にともなう土器の型式学的検討をくわえ、新たに算出された較正年代の妥当性を検討した。検討の結果、先古典期前期から後古典期後期の約 2500 年間という時間幅をもつ基礎データを取得することができ、次の 4 点が主に明らかとなった。①100 cal BC~100 cal AD にはエルサルバドル全域で共通する土器型式が存在する、②従来イロパング火山の噴火後に位置づけられていた複数の土器型式は噴火以前にすでに出現している、③イロパング火山の噴火の被害が最も甚大であったエルサルバドル中央部では少なくとも 650 cal AD 以降に再定住が始まる、④ホヤ・デ・セレンを覆ったロマ・カルデラ火山の噴火年代は、コパドール多彩色土器の存在と再較正年代から 650~700 cal AD に位置づけられる可能性がある。

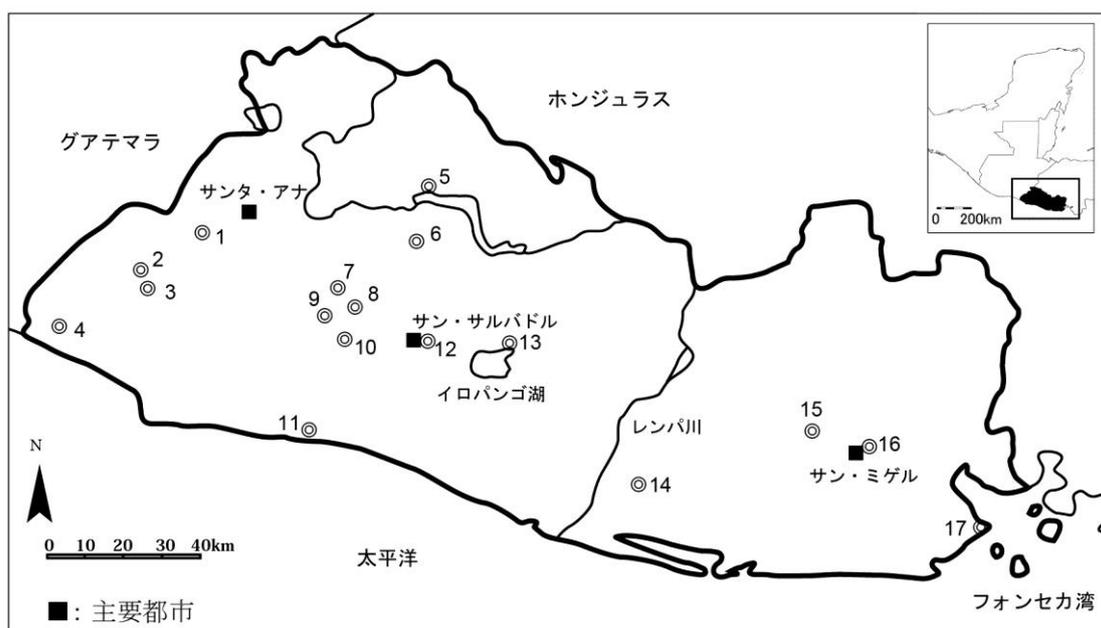


図1 年代測定データが得られているエルサルバドル国内の遺跡

1. チャルチュアパ、2. アタコ、3. サンタ・レティシア、4. カラ・スーシア、
5. ラ・シエナガ、6. シワタン、7. ホヤ・デ・セレン、8. エル・カンビオ、
9. サン・アンドレス、10. ヌエボ・ロウルデス、11. エル・ソンテ、
12. イクス・シネ・リベルタ、13. セロ・エル・カルメン、14. ヌエバ・エスペランサ、
15. ケレパ、16. サンタ・エミリア、17. チキリン

## 7. 「アパートメント・コンパウンドの測量調査概報」

福原弘識（埼玉大学）

発表者はテオティワカン遺跡において、国家権力の表現媒体として機能していたと考えられる建築物の中でもアパートメント・コンパウンド（一般住居址）の建築変遷過程に注

目し、統治機構と一般住人との関係性を軸に初期国家の成立過程の解明を目指してきた。

テオティワカン国家は強力な統治機構の下に、広大な都市を計画的に建設したとされる。特に都市中心部を構成する大型建造物は、国家の宇宙観・世界観を投影するよう、その大きさや配置の綿密な計算がなされ、国家権力の表現媒体として建設されていたことが明らかになっている。都市内部に造営されたアパートメント・コンパウンドもこうした国家権力との関係性において例外ではなく、起源後 200 年前後から国家の統制下で建設が行われた。

本発表では 2009 年より行ってきたテオティワカン遺跡ラ・ベンティージャ地区における測量調査と遺構図のデジタル三次元図面化、および 2014 年に再開した調査の成果を報告する。ラ・ベンティージャ地区は遺跡公園外縁の南西部に位置し、複数のアパートメント・コンパウンドが隣接して存在していることが発掘調査によって確認されている。特に 2014 年夏の調査においては、本地区の中心神殿・行政センターと考えられるアパートメント・コンパウンドの拡張と、隣接する住居址のデータを得ることができ、本地区が統治機構と一般住人を間接的に結ぶ中間的な行政単位としての役割を果たしたという先行研究の蓋然性を高める知見を得た。また、規格化されどの建築物も一様にみえるアパートメント・コンパウンドではあるが、内部の装飾や造形には独自色が見られるなど、強力な国家権力に対して従属的なだけではない住人の姿が明らかになっている。発表では測量調査から明らかになったアパートメント・コンパウンドの変遷過程を概観し、国家形成の過程で統治機構と一般住人の関係性がどのように変化してきたのかを考察する。

## 8. 「メキシコ西部、サユラ、サコアルコ盆地における踏査概報」

吉田晃章（東海大学）

本発表は、2014 年 7 月から 8 月にかけて行われたメキシコ西部ハリスコ州、サユラ盆地およびサコアルコ盆地における踏査概報であり、吉田が研究代表者を務める「メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間の交流」（基盤研究(B)：平成 26 年～28 年）の初回の踏査速報にあたる。本研究は先古典期の埋葬文化に焦点を当てたものであり、研究の計画と概要を報告するが、今回の踏査では製塩活動と関連する遺跡を複数踏査しており、これらの遺跡を中心に報告を行いたい。メキシコ西部地域は、1990 年代以降の調査によって、メキシコ盆地などを中心とした中央高原とは異なる文化が育まれてきたことが徐々に解明されてきた。例えば前 350 年頃から後 350/400 年にかけて現れる、ウェイガンが提唱した円形のピラミッドを擁するテウチトラン伝統である。この伝統の代表的な遺跡としては、テウチトラン村のグアチモンソン遺跡があげられる。テウチトラン伝統とは、円形のピラミッドを中心にその周りを取り囲むように同心円状に方形基壇が配置された、堅坑墓を伴う建築複合である。このテウチトラン伝統がメキシコ西部で終焉を迎えるころ、古典期から後古典期にかけてサユラ盆地では、製塩活動が活発に行なわれるようになる。該当地域はタラスカ文化の西縁に位置し、メソアメリカにおける製塩活動を解明するのにも重要な地域となっている。そのため製塩活動が見られる遺跡も含め、1990 年に始まったサユラ盆地考古学プロジェクト(Proyecto Arqueológico de la Cuenca de Sayula)が盆地内で調査を継続

して行なっている。しかしながら、サユラ盆地内北部とその北に位置するサコアルコ盆地の踏査が手薄であることから、今年度は同地域において広く遺跡分布に関する踏査を実施した。その結果、製塩活動が行われた複数の遺跡が確認できたため、その概略について報告を行いたい。

### 9. 「ニカラグア太平洋岸の考古学調査」

長谷川悦夫（埼玉大学）

ニカラグア太平洋岸はコスタリカ北西部とともに、ニコヤ文化圏を構成する。この地域は、後 800 年頃のオト・マング語族のチョロテガ、後 1350 年頃のユト・アステカ語族のニカラオの移住によってメソアメリカ化したとされてきた。しかし、2000 年代に行われた太平洋岸の 3 つの遺跡の発掘調査によって、この仮説に重大な疑義が投げかけられている。

ニカラオの居住地と考えられ、従来の編年で後 1350-1550 とされる土器が出土する遺跡が調査されたが、放射性炭素年代では後 1200 年を下るものがなく、メソアメリカ文化を構成するいくつかの重要な要素（ピラミッド神殿、香炉、トウモロコシ等）が見つからなかった。

これはニコヤ文化圏の土器編年で、スペイン人直前の時代に空白ができたことを意味する。この空白を埋めるために、スペイン人直前の時代と想定され、なおかつ攪乱されていない良好な堆積を探し、土器と炭素サンプルを得る目的で調査を行った。

まず首都マナグア市周辺をはじめとした太平洋岸の各地で遺跡の踏査を行った。その上で、マナグア湖畔に所在するティピタパ市のチラマティーヨ遺跡を選定して試掘を行った。この調査で、大量の土器片と石器を得ることができた。出土する土器型式は、従来の編年で後 800-1550 年とされるものであり、調査の目的と合致している。ただし、遺物を包含する最上層から最下層まで、一見したところほとんど出土する土器型式の組成が変わらず、また生活面と想定される層も確認できなかつたことから、攪乱されている可能性がある。いずれにせよ、回収した炭素を年代測定にかけるとの予定である。

また、チラマティーヨ遺跡からは玄武岩をはじめとした大量の石器が出土する。石器の製作が行われていたと考えられる。漁具の錘に用いられたと思われる両側面にくびれが入った土器片も多く出土しており、魚類の骨も出土していることから、湖での漁が重要であったことも想定される。来年度以降もこの調査は継続される。

### 10. 「ホンジュラス共和国エル・プエンテ遺跡の発掘調査と 3D スキャンニング」

寺崎秀一郎（早稲田大学）

ホンジュラス共和国西部コパン県ラ・ヒグア市に所在するエル・プエンテ遺跡は 1991 年から 1994 年までラ・エントラダ考古学プロジェクト第 2 フェーズにより、調査・修復がおこなわれ、コパン遺跡に次ぐ同国第二の国立遺跡公園として 1994 年 1 月に開園した。遺跡公園開園後も発表者らは断続的に調査・修復をおこなっているが、本報告では、2011 年に再開した同遺跡建造物 6 の発掘調査の現在までの調査成果について述べる。

建造物 6 は同遺跡中心グループの西端に位置しているが、2003～2005 年の調査によって、上部構造は、疑似アーチによる天井部をもち、ペンチの保存状態も良好であることが確認されていた。その立地や規模から同遺跡支配者層の居住用建造物の一つと考えられており、今回の調査では、上部構造の修復とその最終居住段階の様相を明らかにすることを主眼とした。その結果、2 段の基壇と正面階段の存在を確認し、仮修復をおこなった。また、今回の調査を通じて、最終居住段階では南側に隣接する建造物 7 と接合していることも確認された。整形面を有する漆喰ブロックや石製瓦などの出土状況等から、コパン遺跡周辺地域（たとえばラストロホン遺跡）と類似の屋根構造を有していたと考えられる。今後は、建造物 7 との関連を含めた建造シークエンス、および、埋葬の有無についての確認をおこなう予定である。

また、近年、考古学分野でも利用されている 3D スキャニングは、一般には 3 次元レーザーなどの高価な機材を必要とすることから、現場レベルでは普及しているとは言い難い状況にある。そこで、今年度から出土遺物（石彫・土器）を対象として、より廉価で簡単な装備でおこなう実験を始めたので、その成果についても併せて報告し、デジタルアーカイブについても言及する。

## 1 1. 「ワリ帝国における土器の多様性について」

渡部森哉（南山大学）

中央アンデスでは後 9～10 世紀にワリ帝国が台頭した。この時代にはペルー北部高地から南高地までワリ文化の遺物の分布が認められる。しかしそれらの地域がワリ帝国の直接支配下にあったのか、あるいは在地の人々がワリ文化のものを主体的に取り入れたのかについては研究者の間で意見が分かれている。その理由の 1 つは、この時期に土器をはじめとする物質文化の多様性が認められ、その 1 つとしてワリ文化の土器が確認されるに過ぎないことにある。つまりワリ帝国の支配下にあったならば、ワリの遺物がもっとコンスタントに見つかるはずであると想定する研究者は、ワリ様式の遺物の希少性を根拠として、ワリの帝国支配を否定する。

本発表では、ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡を事例として、ワリ期に遺物の多様性が増加することを明らかにし、それがワリ帝国の支配下での人の動きに起因する可能性を示す。またその比較対象として、先スペイン期の最後に登場したインカ帝国の事例を参照する。インカ帝国では 80 から 100 以上ともいわれる数の民族集団がその支配下にあり、それぞれが地方行政との単位ともなっていた。それらはインカ以前からの形で存続したわけではなく、インカ帝国の支配下で再編成された結果である。インカ帝国の場合、その支配下で広まる物質文化に注目すれば統一性が目立つが、民族集団などに対応する物質文化には多様性が目立つことになる。統一性と多様性は帝国支配の異なる側面を示しているのであり、それらは排他的な関係にあるわけではない。

エル・パラシオ遺跡のデータは、ワリ期にカハマルカ文化の土器のタイプが増加したことを示している。カハマルカ文化のものではないワリ様式の遺物や他の遺物のバリエーションが多いが、カハマルカ地方以外では同一のものは見つかっていないため、搬入土器で

はなく現地で製作されたものと考えられる。それはこの時期の人々の移動から生じる相互交流の結果であるが、その移動自体はあくまでワリ帝国の支配下においてであると考えられる。

## 12. 「チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区出土石彫について」

伊藤伸幸（名古屋大学）

柴田潮音（エルサルバドル文化庁考古局）

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で、地下レーダー探査結果に基づく調査で「様式化されたジャガー頭部」様式の石彫 2 基が出土した。

メソアメリカでは、石彫を配置する法則が確認されている。オルメカ文化やマヤ文化では建造物の前や建造物に囲まれた広場内などに配置されるのが一般的である。先古典期中期における石彫文化はオルメカ文化に代表されるように、石彫が整然と計画され配置されていた。また、先古典期後期、メキシコのチアパス州からグアテマラそしてエル・サルバドルまでの太平洋岸から高地に至る地域で、イサパ-カミナルフユ様式の石彫文化が栄えていた。この石彫文化を代表するイサパやタカリク・アバフ遺跡では建造物に関連して石彫が整然と並んでいた。本調査では、こうした石彫文化のメソアメリカ南東端での様相をチャルチュアパ遺跡で明らかにすることを目的とした。

チャルチュアパ遺跡では、先古典期中期から後古典期までの 30 基を超す石彫が出土している。しかし、出土石彫の大半は科学的な発掘で出土したものではないが、カサ・ブランカ地区調査では素面の石碑や丸彫りの石彫が建造物の近くから、エル・トラピチェ地区ではチャルチュアパ遺跡最大の建造物の中心軸上に並んで出土していた。こうした状況を考慮し、石彫の存在とその配置を解明するために、2012 年 3 月にチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区で建造物周辺の低い部分において地下レーダー探査を実施し、石彫の存在の可能性を探った。

エル・トラピチェ地区地下レーダー調査では、石彫と思われる異物等が確認された。2012 年夏に行われた調査では、この調査結果に基づいて、石彫と思われる異物が連続して確認される E3-1 建造物の南側部分で発掘調査を行った。この結果、石彫破片 1 基、動物形象頭部石彫 2 基が出土した。今回は、このうちの動物形象頭部石彫 2 基について発表する。

### 13. 「アンデス形成期における黒曜石の流通と地域間交流： カンパナユック・ルミ遺跡出土黒曜石の蛍光 X 線分析から」

松本雄一（山形大学）、  
ジェイソン・ネスビット（デュレーン大学）、  
マイケル・グラスコック（ミズーリ大学）、  
ユリ・カベロ・パロミーノ（ペルー・サンマルコス大学）、  
リチャード・バーガー（イエール大学）

本発表では、ペルー中央高地南部に位置するカンパナユック・ルミ遺跡の調査によって得られた黒曜石製品の蛍光 X 線分析の成果を提示し、それを元にアンデス形成期における地域間交流の問題を論じる。

リチャード・バーガーとマイケル・グラスコックの研究により、形成期後期にアヤクチョ県キスピサ産の黒曜石が中央アンデスの広い範囲に流通していたことが明らかとなっている。特に中央高地の大神殿であるチャビン・デ・ワントルにおいては、形成期後期にキスピサ産の黒曜石が在地のチャートなどの石材にとって変わることが確認された。しかし、両者の位置は 600km 以上離れておりその流通のメカニズムは不明のままであった。

カンパナユック・ルミ遺跡は、形成期中期から後期にかけて栄えた神殿であり、2007、2008、2013 年に行われた発掘調査によって同時期の他遺跡に類を見ない大量の黒曜石が出土した。さらに同遺跡からキスピサまでは 100km 程であり、現在までに確認されている中では最も近距離に位置する神殿である。また、その規模も中央高地南部で最大級のものであり、同神殿が黒曜石の遠隔地交易において重要な役割を果たした可能性が指摘されていた。

以上の点から同遺跡出土の黒曜石の産地同定を行うことの重要性は明らかであり、発表者たちは、2014 年 8 月に行われたイエール大学とペルー国立サン・アントニオ・アバド・デル・クスコ大学の共同ワークショップにおいて、カンパナユック・ルミ遺跡出土の黒曜石製品 394 点の蛍光 X 線分析を行った。

結果として、その 70%以上がキスピサ産の黒曜石であり、カンパナユック・ルミにおいては形成期中期からキスピサ産の黒曜石が集中的に利用されていたことが明らかとなった。また、キスピサ以外にもアンデス中央高地南部に広く分布する他の産地から黒曜石が持ち込まれており、少なくともその一部は土器様式と関連付けられることが示唆された。例を挙げると南海岸のコタワシ谷、中央高地南部に位置するアンダワイラス地方、ルカナス地方から運ばれてきた黒曜石が確認されている。これらの地域の土器様式と類似した土器がカンパナユック・ルミ神殿の建築から出土しており、神殿の建築と地域間交流の関係を考察する上で貴重なデータが得られたといえるだろう。またこれらの地域の黒曜石はごくわずかながらチャビン・デ・ワントルにも到達しており、チャビン・デ・ワントルとカンパナユック・ルミの間の非常に強い結びつきが黒曜石の流通という観点からも示される結果となった。

全体として、カンパナユック・ルミは、チャビン・デ・ワントルと密接な関係を持ちつつも地域のセンターとして機能しており、ペルー中央高地南部、南海岸の各地から人々が訪れていたという発掘調査による仮説が裏付けられる結果となった。

#### 1 4. 「中期ホライズン開始期の様相：情報の流れに注目して」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD・山形大学）

アンデス考古学の編年において、紀元後 700 年～1000 年頃の時期を、中期ホライズンと呼ぶ。中期ホライズンに中心的な役割を果たしたのが、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷で成立したワリ国家であり、一般に、中期ホライズンはワリ国家の芸術様式が中央アンデス一帯にひろまった時期として理解されている。中期ホライズンの考え方の原型は、Max Uhle にまでさかのぼることができるが、セリエーションにより現在の中期ホライズンのもとになる編年を確立したのは John Rowe である。さらにこの編年を元に Dorothy Menzel が中期ホライズンを 4 つに細分する編年をつくりあげ、現在多くの研究者に利用されている。しかし、Menzel による編年が発表されてから半世紀以上が経過し、その間に、Anita Cook や Patricia Knobloch らによって Menzel 編年の問題点が指摘されてきた。

このように問題が指摘されている Menzel 編年の中でも、本発表では中期ホライズンの開始期に焦点を当てたい。中期ホライズンの開始期に関しては、Menzel はペルー南海岸のイカ・ナスカ地域に山岳部の土器様式の影響が及んだ時点、すなわちナスカ 9 様式の出現時期として定義している。同時に山岳部では、中央アンデス南高地のティワナク遺跡の芸術様式の影響を受けた、コンチョパタ様式の土器が出現した時期とされている。しかしながら、現在ナスカ文化の研究者の多くは、ナスカ 8 様式、あるいはロロ様式の出現をもって、中期ホライズンの開始としてとらえている。その一方で、ナスカ 9 の出現期を中期ホライズンの始まりと考える研究者も依然として存在する。

本発表では、中期ホライズンの開始期をめぐるこのような混乱を打開するために、情報の流れという点に注目する。発表者が 2002 年に行った発掘調査により、中期ホライズンの開始に先立つ、アヤクーチョ谷とペルー南海岸との交流を示す資料が得られた。それらの資料を基に、アヤクーチョ谷と南海岸との交流の様相を明らかにする。その上で、中期ホライズンの開始期を、イカ・ナスカ地域においてアヤクーチョ谷からの一方的な影響が認められるようになる時期として定義すべきであるという発表者の見解を示し、そのような観点から、中期ホライズンの開始期について従来の議論を整理したい。

#### 1 5. 「新たな古代アメリカの比較文明論の構築に向けて」

青山和夫（茨城大学）、  
坂井正人（山形大学）、  
米延仁志（鳴門教育大学）、  
鈴木 紀（国立民族学博物館）

本研究発表は、科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」プロジェクト（平成 26～30 年度、領域代表：青山和夫）の目的、研究活動と意義について論じる。その目的は、①精密な自然科学的年代測定や古環境復元によって、メソアメリカとアンデスの高精度の編年を確立し環境史を解明する、②高精度の編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明の詳細な社会変動に関する通時的比較研究を行う、③植民地時代から現代

まで、メソアメリカとアンデスの文明が中南米の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。

本研究プロジェクトは、精密な編年をもとにメソアメリカ文明とアンデス文明という、一次文明の詳細な社会変動に関する基礎的な通時的データを収集して比較研究し、環境変動、王権、農耕・牧畜、人口変動、戦争、経済、イデオロギー等の諸側面から実証的かつ多面的に検証する。両文明のデータから、いつ、なぜ、どのように都市や社会が変動し、広域を支配する政治体制が発達したのかを比較する。

実証的な比較文明論の研究の基盤となるのが、高精度の編年と環境史復元である。科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」プロジェクト（平成 21～25 年度、領域代表：青山和夫）において世界標準の年代目盛を作成する上で明らかとなったのは、湖沼の年縞堆積物は蓄積性の誤差をもつという難点であり、また北半球で作成した年代目盛もアンデス地域のような南半球の低緯度では未だにデータの蓄積が少なく 10 数年のズレを伴うことである。本研究では、統計的な誤差がない年輪年代法でこのズレを修正する。

本プロジェクトは、古代文明の詳細な社会変動を解明するだけでなく、古代文明に関する情報が、植民地時代から現在までの中南米の先住民文化に及ぼす影響も考察する。先住民と非先住民の双方が、自分たちの過去や文明をどのように評価しながら、先住民文化を描いてきたかを探る。こうして後世の人間が資源として活用する古代アメリカ文明という視点を提示し、文明の終焉という概念に再考を促す。

本研究は、従来の世界史研究で軽視されてきたメソアメリカ文明とアンデス文明という、古代アメリカの二大文明について、考古学、歴史学、文化人類学等の異なる分野の人文科学と自然科学の多様な研究者が連携して新たな視点や手法による共同研究を推進する。つまり古代アメリカ各地の地域・時代毎の特性や詳細な社会変動を通時的に比較研究して、古代アメリカの比較文明論の新たな展開を目指す。アメリカ大陸のメソアメリカ文明とアンデス文明を正しく理解することにより、旧大陸のいわゆる「四大文明」に基づき形成されてきた一般的な文明観を大幅に修正できる。本研究は、世界の諸文明の共通性と多様性を再認識し、バランスの取れた「真の世界史」の構築に大きく貢献する。

## 16. 「太陽と月のピラミッドに象徴される古代テオティワカンの世界観」

杉山三郎（愛知県立大学）

本発表論文は本年度（2014）のアメリカ考古学協会総会のシンポジウム「メソアメリカ形成期における古代都市の発祥」において杉山が口頭発表した論文「テオティワカンにおける早期都市形成の特性」をさらに発展させた日本語バージョンである。

テオティワカンにおける都市発祥の原動力については自然環境条件、火山噴火、栽培植物・動物種の発展と普及、また土器や黒曜石を中心とした優れた工芸品製作、市場の役割など様々な要素が挙げられてきたが、人々が必要以上に密集した大都市化を促す十分な説明に至っていない。本論文では、古代都市テオティワカンに特徴的な象徴的都市計画とモニュメント性に注目し、そこに表現された宗教的世界観とメソアメリカ特有のカレンダー・システム、そしてその宗教力・政治的意義について述べる。まず、建築に関する 3D

考古学データから都市中心部を形成する 3 大ピラミッドと「死者の大通り」の空間分析を方向性・建造物の長さの単位の研究から解析し、古代人の宇宙観（時間と空間の広がり）の認知構造について議論する。本論文では特に「太陽のピラミッド」と「月のピラミッド」に焦点を絞り、発表者が担当した両ピラミッドでの発掘調査成果を取り組みながら、浮かび上がった古代人の宗教的世界観を解釈する。「月のピラミッド」では 7 層にわたる増築跡が確認され、また「太陽のピラミッド」でも複雑な改築史が特に前庭部で明らかになっている。それぞれの絶対年代資料によると、現在見られる大規模な都市計画は紀元後 200～250 年頃に確立され、その空間配置の解析は 365 日の太陽暦と 260 日の宗教暦が組み込まれていると示唆する。また「月のピラミッド」では 5 基の生贄埋葬墓が発見され、内部から多様な象徴品と生贄体、さらに総計 100 体以上におよぶ動物体も出土しており、古代人の宗教的世界観の一部を読み取ることが可能である。さらに現在までに両ピラミッド周辺で発見されている石彫の資料も考慮すると、「太陽のピラミッド」「月のピラミッド」はそれぞれ 260 日の乾季と 105 日の雨季を象徴し、太陽—熱—戦争—男性、月—水—豊饒—女性の 2 元論的なシンボリズムに関わっていたと提唱する。そしてその伝統はアステカ大神殿、さらに現代先住民族の世界観にも読み取ることが可能であると指摘する。